

# 自己の生き方についての考えを深める道徳の時間の一考察

## A Study on the Hours of Moral Education aimed to deepen the Idea of Children's Way of Living

次世代教育学部国際教育学科

大野 光二

OHNO, Kohji

Department of International Education

Faculty of Education for Future Generations

**キーワード**：他者理解, 自己理解, 道徳的価値の自覚, 自己の生き方, 道徳的実践力

**Abstract** : According to the government teaching guideline for elementary schools which was revised in 2008, to deepen the idea of children's way of living was added to the target of the hours of moral education.

The purpose of this research is to clarify the process of the class and the appropriate questions, in order to realize the goals through the hours of moral education.

The results were as follows. First, to "cultivate the children's heart" through their experiences and activities is effective. Second, to ask the proper questions which are aimed to retrieve what they have experienced is effective as well.

**Keywords** : Understanding others, Self-understanding, Awareness of the moral values, Way of living, Practical morality

### 1 はじめに

2008年に改訂された学習指導要領では、小学校の道徳の時間の目標に、新たに「自己の生き方についての考え」という文言が加わり、「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め」と明記された。

そのことにより、小学校の道徳の時間の目標が中学校の道徳の時間の目標に示されている「道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め」へとつながり、小学校段階での「自己の生き方についての考えを深める」ことから、中学校段階での「人間としての生き方についての自覚を深める」ことへの発展が明確にされた。

小学校の道徳の時間の目標に示されている「道徳的価値の自覚」と「自己の生き方についての考えを深める」との関係について、小学校学習指導要領解説道徳編（2008）では、次のように述べられている。

「人格の基盤を形成する小学校の段階においては、児童が道徳的価値についての自覚を深め、自己の中に形成された道徳的価値を基盤として、自己の生き方についての考えを深めていくことができるようにするこ

とが大切である。児童は、道徳的価値の自覚を深めていく過程で同時に自己の生き方についての考えも深めているが、特にそのことを意識して指導することが重要である。」

そこで、小学校の道徳の時間において「自己の生き方についての考えを深める」ことをどのように捉え、道徳の時間をどのように展開していけばよいか、授業実践の分析結果を通して明らかにしていきたい。

### 2 自己の生き方についての考えを深めるとは

道徳の時間の最終的な目標は「道徳的実践力の育成」であり、その実践力を育成していくための重要な要素として「道徳的価値の自覚」と「自己の生き方についての考えを深める」ことが取り上げられている。

「道徳的価値の自覚」について、小学校学習指導要領解説道徳編（2008）では、次の三つの事柄を押さえておくことが例示されている。

「一つは道徳的価値についての理解である。道徳的価値が人間らしさを表すものであるため、同時に人間理解や他者理解を深めていくようにする。二つは、自

分とのかかわりで価値がとらえられることである。そのことにあわせて自己理解を深めていくようにする。三つは、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われることである。」

このことは、道徳的価値の自覚が、他者理解や自己理解を通してなされるものであり、道徳的価値にかかわる人間としての生き方を自分に必要なものとして捉えたとき、自己の課題が明らかになり、価値実現への意欲が高まっていくことを示している。

こうした観点に立って、「自己の生き方についての考えを深める」ことをどのように捉えていけばよいか考えたとき、島（2008）は、「道徳的価値の自覚のより一層の深まりを求めるものである。そのためには、ねらいとする道徳的価値にかかわって、自分自身への問いかけを深め、よりよくなろうとしてきた自分、よりよく生きていきたいと願っている自分を感じたり、自分の特徴やさらに伸ばしていきたい自己を深く見つめたりするなど、自らの成長を実感し、自己や社会の未来に夢や希望をもち、意欲的に生きていこうとする思いや願いを深めることが大切である。」と述べ、児童が自分自身への問いかけを深めながら価値を追求していくことで、自己の生き方についての考えを深めていくことができると指摘している。

また、赤堀（2010）は、「道徳の時間の特質である道徳的価値の自覚を一層促し、そのことを基盤としながら、子どもが自己の生き方に結びつけて考えてほしいとの趣旨を重視したものである。道徳の時間が人間としてのあり方や生き方の礎となる道徳的価値について学び、それを自己の生き方に結びつけながら自覚を深め、道徳的実践力を育成するものであることがより明確になったところである。」と述べている。また「端的に言えば、道徳の時間で、子どもたち一人一人がいかに自分とのかかわりで道徳的価値について考え、道徳的価値を視点に自分自身を振り返ることができるような授業を組み立てることが求められている。」と述べている。

これらのことから「自己の生き方についての考えを深める」とは、子どもが自分とのかかわりで道徳的価値をとらえたり、とらえた価値に照らして自分を深く見つめたりしながら、よりよく生きるための課題を意識し、それを自己の生き方として実現しようとする思いや願いを高めていくことであるととらえることができる。

### 3 研究の視点

これまでの一般的な道徳の時間の学習の流れを振り返ると、まず導入でねらいとする価値への方向づけを行い、本時の学習課題を把握する。展開前段では、中心的な資料を使って道徳的価値を追求・把握する。展開後段では、把握した価値に照らして自分を振り返る。そして終末で本時の学習内容のまとめをするといった場合が多い。

この場合、図1のように、展開前段では、資料の主人公の立場から気持ちを追求し、展開後段のこれまでの自分を振り返る段階で自分とのかかわりを意識する場合が多い。

展開前段	展開後段
資料を使っての価値把握	自己内省
主人公の気持ちを考える	これまでの自分を振り返る
	自分とのかかわりを意識しながら学習を進める

図1 一般的な道徳の時間の学習の流れ

こうした授業から、「自己の生き方についての考えを深める」ということをこれまで以上に意識した学習にしていくには、図2のように、展開前段において、資料の主人公の気持ちや考えを追求していく段階においても、自分とのかかわりを意識しながら学習を進めていくことが大切であると考えた。

展開前段	展開後段
価値把握	自己内省
自分を主人公に重ねながら気持ちを考えていく	これまでの自分を振り返る
自分とのかかわりを意識しながら学習を進める	

図2 自己の生き方についての考えを深めることを意識した道徳の時間の学習の流れ

では、展開前段においても自分とのかかわりを意識しながら学習を進めていくには、どうしたらよいか。その方策の一つとして、児童が自分を主人公に重ねたり自分と主人公とを比べたりしながら気持ちを追究していくこと、つまり自分というものを持ちながら主人公の気持ちを追究していくことが大切ではないかと考えた。

そこで、自己の生き方についての考えを深めていく授業にしていくため、次のような視点から授業を構成

し、その効果を分析することとした。

- ① 関連的な道徳の学習を構成し、本時で取り上げる価値内容とかかわる体験や活動を通して児童の心が耕されるようにする。
- ② 資料の主人公の気持ちを追求する場面で自分とのかかわりを意識しながら考えることのできる発問を投入する。

①については、道徳の時間に至るまでの日々の体験や活動の中で、道徳的価値にかかわって児童の心を耕しておくことで、主人公の気持ちを考えていく拠り所として、体験や活動を通して考えたり感じたりしたことを想起することができると思ったからである。

心を耕すとは、関連的な道徳の学習の中で道徳の時間に扱う価値について児童が価値を実現することの難しさやそれを乗り越えて価値を実現できた喜びなどを意識できるようにしていくことである。

②については、自分の体験や活動とつないだり、体験や活動から生まれてきた気持ちを想起したりしながら気持ちを考えることができるような発問を工夫することによって、児童は主人公に自分を重ねたり、主人公と自分とを比べたりしながら主人公の気持ちを探っていくことができると思ったからである。

#### 4 実践事例と考察

##### (1) 実践の対象

岡山県内A小学校 5年 2組 26名

##### (2) 分析の方法・視点

ビデオカメラと録音を使って授業の様子を記録し、授業者の発問や児童の発言等を音声や映像から分析し、詳しい授業記録を作成した。また、抽出児の授業前・授業中・授業後の反応を分析し、自分とのかかわりで価値を追求している姿や意識の変容の様子を探った。

##### (3) 授業の構想

授業を実施するにあたり、高学年の内容項目2(2)「より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。」を取り上げ、次のような関連的な道徳学習の構想を立てた。

表1 関連的な道徳学習の構想

- |   |                |
|---|----------------|
| 1 | テーマ 「がんばれ わたし」 |
| 2 | ねらい            |

道徳の時間を要として、日々のくらしや「がんばれわたしプロジェクト」の活動などと関連を図りながら学習を進めることで、より高い目標を立て、その実現に向けてくじけないで努力しようとする態度を養う。

##### 3 関連的な学習の構想

学級活動「運動会で自分を高めよう」

- ・運動会でどんなことを頑張りたいか話し合い自分の目標を決める。

〈日々のくらし〉「運動会プロジェクト」

- ・運動会に向けて決めた目標の実現をめざして努力する。

教科「体育」・学校行事「運動会」

- ・自分の決めた目標の達成に向けて努力する。

〈日々のくらし〉「がんばれわたしプロジェクト」

- ・「運動会プロジェクト」を振り返り、新たな自分の目標を決めて取り組む。

道徳の時間「くじけないで」1-(2)

- ・より高い目標を立てくじけないで努力することの大切さについて考える。

〈日々のくらし〉「がんばれわたしプロジェクトレベルアップ作戦」

- ・目標を修正したり、より高い目標を決めたりして取り組む。

学級活動「自分の成長をふり返ろう」

- ・これまでの取り組みを振り返り、自分宛にメッセージを書く。

これをもとに、関連的な学習の要となる道徳の時間の構想を次のように考えた。

表2 要となる道徳の時間の構想

- |   |  |
|---|--|
| 1 | 主題名 くじけない心で  |
| 2 | 資料名<br>「心にうったえる音楽を目指して－梯剛之」  |
| 3 | ねらい<br>より高い目標を立てくじけないで努力することの大切さに気づき、今の自分を乗り越え成長していこうとする心情を育てる。  |
| 4 | 展開の概要<br>(1)「がんばれわたしプロジェクト」について話し合う。<br>・プロジェクトノートを見ながら感想を話し合うことで、本時のめあてへとつないでいく。<br>(2)資料「心にうったえる音楽を目指して」を読み主人公の気持ちを話し合う。<br>①コンクールへの出場を決意したときの気持ち<br>・これまでの実力が評価され、さらに自分を成長させるために出場を決意したことをつかませる。<br>②1日に7時間練習しても半ページしか進まなかったときの気持ち(中心発問)<br>・ワークシートに書かせることで、その時の心の中をしっかりと考えられるようにする。<br>・弱い気持ちがあったのになぜ乗り越えることができたのか問いかけ、自分の目標を実現しようとする強い意志が働いていたことに気付かせる。 |

③観客の拍手に包まれた時の気持ち

- ・努力が認められた喜びとともにさらに高い目標に向かって努力しようとする気持ちに共感させる。

(3) これまでの自分を振り返る。

- ・日々のくらしやこれまでの取り組みをもとに、もっと自分を成長させたいという気持ちで努力した経験やその時の気持ちを話し合わせる。

(4) 教師の話聞く。

- ・現在の梯さんの活動を紹介し、実践へ意欲づけを図る。

(4) 自分とのかかわりで価値を追求していくための手立て

前述のような道徳の学習の流れの中で、道徳の時間に自分とのかかわりで価値を追求していくための手立てとして、次の二点について取り上げることにした。

① 関連的な学習の中で子どもの心を耕し、自分の気持ちと主人公の気持ちを重ねやすくする。

- ・「運動会プロジェクト」では、運動会に向けて決めた目標に向かって取り組んだ内容や感じたことを運動会ノートに記録していく。

- ・「がんばれわたしプロジェクト」では、運動会で身に付けた力をその後の生活でも生かそうと投げかけ、新たな目標を決めて取り組む。

これらの活動を通して、努力してもうまくいなくてくじけそうになる気持ちや目標の実現に向けてがんばれた喜びなどを体験できるようにする。

② 中心場面で、主人公の気持ちと自分の気持ちをつなぐ発問を工夫し、自分とのかかわりを意識しながら主人公の気持ちを考えることができるようにする。

- ・中心場面として、コンクールに向けて努力しても練習がなかなか進まなかった場面を取り上げ、その時の主人公の気持ちを考えさせる際、主人公の気持ちと自分の気持ちをつなぐ発問を工夫する。

(5) 授業の実際と抽出児の動き

①中心発問における児童の反応

展開前段の中心発問における児童の反応は、次のようになった。

表3 中心発問における最初の反応

発言者	発言内容
T	課題曲が6曲出ました。しかし楽譜を渡されたのは1ヶ月半前、梯さんは目が不自由で楽譜が読めません。コンクール用なので点字の楽譜はないし曲を録音した

CDありません。そこで梯さんは、毎日7時間に及ぶ練習を重ねました。しかし、一日に半ページしか進むことができません。その時、梯さんはどんな気持ちだったでしょう。

C<sub>9</sub> 半ページ進まなくてくやしい、もっと練習をしないといけないと思った。

C<sub>17</sub> 少ししか進まなくて悔しいけど、このコンクールで良い成績を取ればピアニストとして認められるのでがんばろう。

C<sub>18</sub> もっともっと練習して少しずつでもいいから上手になりたい。完成した音楽をみんなに聴いてもらいたい。

C<sub>20</sub> 1日7時間も練習しているのにまだ半分しかできていない。どうしよう。このままで間に合うかなあ。

C<sub>21</sub> コンクールを目指して1日7時間もやっているのに半ページしか進まないのでも悔しい。

C<sub>11</sub> 今までがんばってきたんだ。あきらめてはいけない。

C<sub>16</sub> もっとがんばらないといけない。

C<sub>2</sub> もうあきらめようか。

(Tは教師 Cは児童)

〈考察〉

それぞれの児童の価値観に根ざして、C<sub>9</sub>やC<sub>17</sub>のように苦しくても努力しようという気持ちと、C<sub>20</sub>のようにできるかどうか不安な気持ちの両面が出されている。しかし反応はやや表面的で、目標に向かって努力しようという建前的な反応が多いと感じられた。

そこで、次のような発問を投入すると、児童の反応が変わってきている。

表4 自分とつなぐ発問後の反応

発言者	発言内容
T	もし自分だったらと考えてごらん。
C <sub>19</sub>	いくら練習しても進まないから、やめようかなあとと思う。
T	どうしてそう思うの。
C <sub>19</sub>	7時間ぐらい練習しても進まないから。
C <sub>26</sub>	悔しい。一生懸命練習しても半ページしか進まないから
C <sub>24</sub>	悔しい。これだけ練習したのに半ページしかできないから。
C <sub>16</sub>	またがんばろうと思う。もう少しがんばったらできそうだから。
C <sub>4</sub>	あきらめようかなあ。半ページしか進まないのでもコンクールに間に合うかどうか分からないし、間に合ったとしても、うまく弾けるかどうか分からないから。
T	今自分だったらと考えたけど、梯さんにもできるかなあという不安な気持ちはいっぱいあったのですね。

(Tは教師 Cは児童)

〈考察〉

「もし自分だったら」という発問を投入することでC<sub>19</sub>やC<sub>26</sub>のように、児童は自分とつないで主人公の

気持ちを考えることができるようになってきている。そして梯さんの強い心の中にもくじけそうな気持ちがあったことを自分と比べながら受け止めることができていく。

そこで、梯さんはそんな気持ちをどう乗り越えようとしたのかという話し合いに入ることにした。

表5 心の支えを探る発問と反応

発言者	発言内容
T	梯さんは、できるかなあと言う不安な気持ちもいっぱいあったのに乗り越えることができたのは、どんな気持ちがあったからでしょう。
C <sub>14</sub>	お母さんが一生懸命応援してくれたから。
C <sub>22</sub>	毎日7時間も一緒に練習してくれたので、お母さんに自分の演奏を聴かせてあげたい。
T	皆さんもあきらめようと思ったけどがんばったことがありますね。その時のことを思い起こしてごらん。どんな気持ちでやっていたの。
C <sub>10</sub>	何度も何度もあきらめかけたけど、あきらめないでがんばる気持ち。
C <sub>23</sub>	あきらめたらできないので、絶対にあきらめないという気持ち。あきらめようという気持ちよりあきらめない気持ちの方が大きかった。

(Tは教師 Cは児童)

#### 〈考察〉

自分たちと同じように不安な気持ちがあったのに、梯さんはなぜあきらめなかったのか心の支えを探っていった。児童は最初、C<sub>14</sub>やC<sub>22</sub>のように母親の存在に着目していたが、自分の体験を想起させる補助発問を投入することにより、C<sub>10</sub>やC<sub>23</sub>のようにあきらめたくない、どうしても目標を達成したいという心の強さに着目するようになってきている。

児童が困難を乗り越えるレベルと梯さんが困難を乗り越えるレベルとは大きな差があると想定されるが、自分の体験からも主人公の心の支えを探っていくことで、梯さんが全く自分とはかけ離れた存在ではないこと、自分にも梯さんに近い気持ちがあったのだということ意識することができるようになってきている。

## ②抽出児の変容の姿

### ア 抽出児の実態

授業を実施するに当たって、次の3名の抽出児を選定し、抽出児がどのような反応を示すかを記録し、変容の様子を探っていった。

表6 抽出児として取り上げた児童の実態

抽出児	価値にかかわる状況
A児 (C <sub>4</sub> )	子どもらしい素直はあるが、自分を高めようという気持ちは低く、しんどいことや面倒なことは避けて通ろうとする。
B児 (C <sub>18</sub> )	自分を向上させようとする気持ちはあり、目標を立てて努力しようとするが、やや根気強さに欠け、目標が達成できにくい。
C児 (C <sub>14</sub> )	自分の立てた目標を達成しようと努力することができ、その成果も少しずつ見られるようになってきているが、やや積極性に欠け行動として現れにくい。

### イ A児の姿とその考察

A児の関連的な学習における道徳の時間の授業前、授業中、および授業後の反応を探ってみると次のようになった。

表7 A児の記述及び発言の内容

	ワークシートへの記述・発言内容
授業開始前	「運動会プロジェクトでは、げんかいをこえることという目標を立てた。よく頑張ったと思った。がんばれわたしプロジェクトでは一日3回発表するという目標を立てているが、手をあげることはできていない。」(記述)
中心場面	「もっと練習しないと間に合わないかもしれない。」(記述) 「あきらめようかなあ。半ページしか進まないのコンクールに間に合うかどうか分からないし、間に合ったとしてもうまく弾けるかどうか分からないから。」(発言)
授業後	「梯さんの話を聞いて、あきらめずに努力することが大切だと思った。自分も、あきらめずに最後までやりとげたい。」(記述)
関連学習後	「がんばれわたしプロジェクトでは、発表をたくさんするめあてだったけど、あまりたくさんできなかった。一日にたくさん発表するのがとてもむずかしいということがよく分かった。これからは、もっとたくさん発表したい。」(記述)

#### 〈考察〉

##### ・授業開始前の反応について

運動会プロジェクトでは、学級全体として動く中で自分も目標が達成できたと考えているが、次のプロジェクトでは、一人一人目標が違うので達成したいという気持ちはもっているが実現は難しい状況となっている。

##### ・中心場面での反応について

ワークシートでは、あまり詳しい記述は見られなかったが、自分だったらどんな気持ちになるかという発問に対して上記のような反応をし、自分とのかかわりで価値を追求しようとしている様子をうかがうことができる。

・授業終了後の反応について

あきらめずに努力することの大切さを、自分とのかかわりの中で捉えている様子がうかがえる。この時点では、実践への意欲を高めることができている。

・関連的な学習終了後の反応について

目標を達成することがいかに難しいことか意識することができており、「毎日めあてを意識して生活していた」ことが推測できる。

以前のA児と比較すると、向上心がやる気が出てきており、そういう気持ちが生まれてきたからこそ、価値を実現することの難しさにも気付くことができたと考えられる。

ウ B児の姿とその考察

B児の反応をまとめると次のようになった。

表8 B児の記述及び発言の内容

	ワークシートへの記述・発言内容
授業開始前	「運動会プロジェクトでは、練習を通して絆を深めるという目標を立てた。それは達成できたが、もっとチャレンジする心があればよかった。がんばれわたしプロジェクトでは授業で自分から発表するという目標を立てたがはずかしくて手が挙げられない。」(記述)
中心場面	「もっともっと練習して、少しずつでもいいから上手になりたい。完成した音楽をみんなに聴いてもらいたい。」(記述) 発言もワークシートの記述内容と同じ
授業終了後	「梯さんの話を聞いて、あきらめずに最後まで努力すること、つらいことがあっても乗り越えて最後までやりとげることが大切だと思った。わたしは、はずかしい気持ちを乗り越えて手を挙げることができなかつたから、これからは、それを乗り越えて手を挙げて発表したい。」(記述)
関連学習終了後	「プロジェクトを始めてから発表に意識を持ち始めた。プロジェクトが終わるころには、発表も1日1回はできるようになった。先生に当てられて立ったしゅんかんはきんちょうしたけど、はずかしい気持ちをのりこえて発表することができるようになって、心が成長したなと感じた。プロジェクトがなくてもはずかしい気持ちをのりこえて発表をがんばりたい。」(記述)

〈考察〉

・授業開始前の反応について

運動会プロジェクトを通して仲間との絆が深まったと考えているが、自分からもっと積極的に動けばよかつたと反省している。次のプロジェクトでは、その反省を生かし「自分から発表する」と主体的な行動をめざしているが、手を挙げようと思っても挙げられないと自分の弱さも感じている。

・中心場面での反応について

もっともっと練習して少しでも上手になりたいと記述し、これまでの取り組みを通して意識している「もっと積極的に目標達成に向けてチャレンジしたい」という思いが、主人公の気持ちの中に表れていることが分かる。

・授業終了後の反応について

主人公の気持ちと自分の気持ちを比べながらあきらめずに努力することの大切さ、つらいことがあってもそれを乗り越えること大切さをつかんでいる。

・関連的な学習終了後の反応について

はずかしい気持ちを乗り越えて今の自分を向上させようとしてきた様子がうかがえる。そのことで、自分の心が成長したと感じ、「プロジェクトがなくてもがんばりたい」と、これからの取り組みへの意欲ものぞかせている。

以前のB児に比べると積極的な姿勢が生まれてきており、自分を向上させることへの意欲が感じられるようになってきている。

エ C児の変容の姿とその考察

C児の反応をまとめると次のようになった。

表9 C児の記述及び発言の内容

	ワークシートへの記述・発言内容
授業開始前	「運動会プロジェクトでは「けじめ」「信頼」「チャレンジ」の三つを目標にがんばった。難しい大技があり大変だったけど、成功したときはすごく嬉しかった。私は、この練習で身に付けたことが4つある。最初に書いたことともう一つ、たくさんがんばった分だけたくさんうれしくなるということだ。がんばれわたしプロジェクトでの目標は、自分から進んでだれかのために手伝うことだ。しかし自分から進んで手伝おうと思っても、はずかしくて友だちや仲の良い人以外、手伝うことができている。」(記述)

中心場面	「コンクールまであと少ししかないのにどうしよう。お母さんも自分のために7時間もつきあってくれているのに、選ばれなかったらきっと悲しむだろうな。お母さんに申し訳ないなあ。でもぎりぎりまで挑戦したいなあ。」(記述) 「お母さんが一生けん命応援してくれたから。」(発言)
授業終了後	「梯さんのように、間に合いそうにないときも悔しい気持ちがあるけれどだれか支えてくれる人のことを思い、あきらめないことが大切だと思った。私は、運動会ノートやがんばれプロジェクトのノートを書いてきて、よかったなと思った。今まで面倒だなという時もあったけど書いた後に読んで振り返ったり、次はこれをがんばろうと思ったりして成長し続けられるからだ。」(記述)
関連学習終了後	「プロジェクトをする前の私は、手伝おうと思っていてもなかなか手伝えなかった。しかしプロジェクトを始めると、だれかのためにがんばろうと思えてきて、前の自分より終わった後は、すごくすっきりするし、もっとうれしくなった。レベルアップ作戦では、はずかしさをのりこえることを自分に言い聞かせることができた。だれかのために思って手伝うことができたし、めあてをもって成長したから、他のことも伸びて、本当に良かったと思った。これからもがんばりたい。」(記述)

#### 〈考察〉

##### ・授業開始前の反応について

運動会プロジェクトでは、自分から進んで努力し成し遂げることのすばらしさを「たくさんがんばった分だけたくさんうれしくなれる」と体験を通して学ぶことができている。しかし、「がんばれわたしプロジェクト」では、「自分から進んで手伝おうと思ってもなかなか手伝うことができない。」と自分が立てた目標を実現することの難しさも感じている。

##### ・中心場面での反応について

ワークシートへの記述では、目標が達成できるかどうか不安な気持ちと、それでもぎりぎりまで努力したいという思いの両面が出され、これまでの取り組みを通して感じ取った目標を実現することの難しさとすばらしさが基盤となって、主人公の気持ちを考えることができている。

##### ・授業終了後の反応について

自分を支えてくれる周りの人のことを思いながら、目標に向かって努力することの大切さをつかんでいる。また、自分のこれまでの取り組みを振り返ることによって、これまでの努力の跡が分かり、さらにがんばろうとする意欲がわいてくることを意識している。

##### ・関連的な学習終了後の反応について

プロジェクトを始める前の自分と今の自分とを比べ、どのように変わってきたのかを客観的に見つめることができおり、目標を決めて取り組むことによって自分自身が成長することを体験を通して学んでいる。

以前のC児と比べると、自分の目標を一つずつ達成することで、自信が生まれ、みんなのことを考えたより積極的な姿勢が見られるようになってきている。

#### (6) 実践事例のまとめ

児童の発言や抽出児の反応をもとに、実践の結果をまとめると、次のようになる。

- ① 関連的な道徳の学習の中で、内容項目にかかわる体験や活動を通して子どもの心を耕すことについて  
「運動会プロジェクト」では、運動会でどんなことをがんばりたいか話し合い、自分が決めた目標に向かって取り組む活動を位置づけ、取り組みを通して感じたことをノートに記録するようにした。こうした活動を通して自分の目標を実現することの難しさとともに、目標に向けてがんばることができた喜びも感じ取ることができている。

また、この体験を通して成功感を味わった児童は、運動会で身に付けた力をその後の生活の中で生かそうと、「がんばれわたしプロジェクト」に取り組んだ。しかし、この取り組みは、学級全体の目標を達成するための一人一人の目標達成という形ではなく、一人一人が自分を高めるためにどんなことに取り組むか考えて取り組んでいるため、次の目標がはっきり持てなかったり、自分を高めようとする気持ちが少なかったりする児童も見られ、自分の目標を達成することの難しさを感じるようになってきていた。

こうした状況の中で、本時の道徳の授業が行われたため、それぞれの児童が自分なりの課題意識をもって授業に取り組むことができている。また、中心場面での児童の発言や抽出児の反応を見ると、こうしたプロジェクトを通して学んだ、目標を達成することの難しさやそれを乗り越えようとしてがんばってきた気持ちが、主人公の気持ちを推測する発言の中に生かされていることがうかがえる。

- ② 自分とのかかわりで主人公の気持ちを考えていくため発問について

今回の授業の中心場面として取り上げたコンクールに向けて練習がなかなか進まない場面での主人公の気持ちを考えさせる時、主人公と自分とをつなぐ

発問として、「もし自分が主人公だったらどんな気持ちになると思うか。」と「自分はどんな気持ちがあったからがんばることができたのか。」の二つを投入した。

こうすることで、大きな目標を達成した梯さんにも自分と同じようにくじけそうになる心の弱さがあったことを意識づけることができている。また、そんな梯さんが、どんな気持ちで乗り越えようとしたのか考える場面でも、「どうしても自分の目標を達成したい。」という心の強さに着目した発言が見られるようになってきている。

このように、主人公の気持ちを考えさせる時、もし自分だったらと自分とつなぎながら考えたり、自分の体験を拠り所にして主人公の気持ちを考えたりすることで、一見自分とかけ離れた存在の主人公が実は自分と同じような心の弱さを持っていたり、主人公が価値を実現した気持ちの中に自分が感じた気持ちも含まれていたりすることに気づくことができしており、自分とのかかわりを意識しながら主人公の気持ちを追求することができていると考えることができる。

## 5 研究のまとめ

今回の事例研究では、自己の生き方についての考えを深める授業にしていくために、展開前段に焦点を当て、子どもが自分とのかかわりで価値を追求していくことができるよう、二つの手立てを工夫することの効果について実証してきた。

道徳の授業に入る前に内容項目にかかわる豊かな体験を積むことは、展開前段で主人公の気持ちを考えていく上で有効に働き、体験を通して感じたり考えたりしたことが主人公の気持ちを考えていく中に反映されることがわかった。また、主人公の気持ちを考えさせるときに自分とのかかわりを意識させる発問を工夫することで、自分を主人公の立場に置いて考えたり、自分のこれまでの体験をもとに主人公の気持ちを考えたりすることができることも分かった。

このように、自己を振り返る展開後段だけでなく、資料の主人公の気持ちを追及していく展開前段においても自分とのかかわりを意識しながら価値を追求することができるように工夫していくことで、自己の生き方についての考えを深めるということをより強く意識した授業が展開できることが分かった。

しかし、低学年の場合は、主人公の気持ちを自分と

のかかわりで追及していくことは、発達段階から考えて難しいと思われる。また、主人公の心の支えは、自分の体験からだけでは考えることはできず、主人公の置かれている立場や状況から推測することで見つけていく場合が多い。

こうした点に配慮しながら、今後も実践事例を通して「自己の考えを深めていく授業」にしていくためのより効果的な手立てについて明らかにしていきたい。

## 引用文献

- ・文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説道徳編」東洋館出版社 P30
- ・押谷由夫・福田富美雄編著（2008）「小学校新学習指導要領の展開道徳編」明治図書 P31
- ・赤堀博行編著（2010）「自己の生き方についての考えを深める道徳授業の創造新小学校道徳指導細案」明治図書 P16-17

## 参考文献

- ・永田繁雄監修 岡山県小学校道徳教育研究会著（2009）「新しい自分に出会う道徳の学習」東洋館出版
- ・行安茂著（1993）「自己実現の道徳と教育」以文社
- ・押谷由夫著（1994）「道徳教育新時代生きる喜びを子どもたちに」国土社